

ディケンズ「公開朗読」研究

—— 自作朗読家としてのディケンズ ——

荒井良雄

1. 「公開朗読」の発端

チャールズ・ディケンズ¹⁾は、19世紀の英国を代表する国民的小説家であり、世界文学でも屈指の偉大な小説家の一人であるが、まことにユニークな自作の「公開朗読」で大成功をおさめた希有な小説家でもあった。小説家としてのディケンズは、これまでに伝記や評論や論文などで盛んに論及され研究されてきたので、ここでは晩年の約20年間にわたって、情熱を傾け、心血を注いで遂行した「公開朗読」における自作朗読家としてのディケンズ像に焦点を絞って、彼が残した21編の朗読台本²⁾を研究することによって、ディケンズ文学の特質と魅力を探っていききたい。

1853年12月27日は、当時41歳であった小説家ディケンズの生涯に、一大転機をもたらした日であった。自作朗読家として初めて「公開朗読」をおこなった画期的な日であったのである。その夜、ディケンズはバーミンガムのタウン・ホール³⁾において、丁度10年前の12月に出版して初版6千部、再版1万5千部を年内に売り尽くしたという評判の名作『クリスマス・キャロル』⁴⁾ (1843) を朗読して、熱狂的な大喝采を博した。この朗読会の目的は慈善募金で、200ポンド以上の大金が集まったものと思われる。この慈善朗読会は、29日に『炉端のコオロギ』⁵⁾、30日に『キャロル』の再読という形で、合計3回おこなわれて、あとの2回では400ポンドから500ポンドの募金が集まった。聴衆の数は3回で6千人に近かった⁶⁾。

この慈善朗読会の成功が大きな反響を呼んで、ディケンズはそれ以後、慈善や公共奉仕のための公開朗読会に何度も引っ張り出されるようになった。子供の頃から芝居が大好きで、20歳の時には俳優を職業⁷⁾にすることを本気に考えたこともあったディケンズは、1858年以来、企画者や支持者や聴衆の要望に答えるため、俳優としての才能と技術を生かして、相当の収入源になったプロフェッショナルな「有料公開朗読会」⁸⁾の自作朗読家としての道を歩

むようになった。そして1870年6月9日に亡くなる3か月前まで、健康を害してドクター・ストップがかかっても、公開朗読を中止することはなかった⁹⁾。それほどの情熱と時間とエネルギーを傾注した公開朗読のために、1858年4月以後、創作力と体力が衰えたというのが大方の見方であり、それはその通りであろう。しかし、『ピクウィック・クラブ』(1836)、『オリヴァー・トゥイスト』(1837)、『ニコラス・ニクルビー』(1838)、『骨董屋』(1840)、『バーナビー・ラッジ』(1841)、『マーティン・チャズルウィット』(1843)、『デイヴィッド・コパーフィールド』(1849)、『荒涼館』(1852)、『つらいご時世』(1854)、『リトル・ドリット』(1855)¹⁰⁾などの大作をすでに完成して、ヴィクトリア朝を代表する小説家として功なり名とげたディケンズが、公開朗読にこだわり続けたからには、それなりの原因と意図と決意があったものと思われる。

ディケンズは、公開朗読を始める前年、すなわち1857年に、慈善のためのアマチュア演劇公演に賛助出演を依頼した18歳の美貌の女優エレン・ターナン¹¹⁾と親密になって、20年間連れ添って来た妻のキャサリンとの仲がうまくいかず、1858年、46歳のとき別居するに至った。妻と愛人と大勢の子供¹²⁾たちの将来という家庭の事情や、スキャンダルの暴露を恐れる心労、一流の芸術家として創造力をいかに保つかということなど、さまざまな問題を抱え込んだディケンズは、「なんとかしなくては」¹³⁾と考えていたに違いない。文壇の大御所でライヴァルでもあったサッカレーとの不和¹⁴⁾、小さい頃からの夢であったギヤズヒルの邸宅の購入と改造という経済上の問題¹⁵⁾もあった。そうした人生の危機と転機にさしかかっていたディケンズが、子供の頃からの憧れであった演劇の才能を生かした自作朗読に没頭することで、大勢の聴衆との直接的で人間的な触れ合いを求め、華やかな舞台と暖かい拍手喝采に慰めを見いだすために、作家と俳優を一つにした新しい芸術形式に新境地を開拓しようとしたのかも知れない。それに何よりも、公開朗読は大きな即金収入¹⁶⁾になったのである。

世に言う創作力の衰退に関しては、1859年には『二都物語』、1860年には『大いなる遺産』、1864年には『われらが共通の友』¹⁷⁾といった大作を書いて、衰えるどころか健在ぶりを示した。それ以後は、公開朗読のための台本作成に力を入れて、1回約2時間から2時間半の朗読公演のために、長編を切り詰め、短編を練り直し、改訂に次ぐ改訂によって、21編の朗読台本を残した。そこには確実に、公開朗読の台本作者としての新しいディケンズ像がある。

ディケンズは、小説家として成功したあと、生涯変わらぬ演劇への情熱と才能に、文士としての知名度と実力を見事に重ね合わせて、自作自演の公開朗読という新しい芸術形式を確立し、世界でも類例がないオールラウンドな文学者としても成功したのだった。このような超一流の大物芸術家は、ディケンズの前にはシェイクスピア¹⁸⁾、ディケンズの後ではチャップリン¹⁹⁾とノエル・カワード²⁰⁾がいるのみであろう。

2. ディケンズの演劇志向

ディケンズの自叙伝的大作『デイヴィッド・コパーフィールド』の第2章²¹⁾に、幼年時代のデイヴィッドが、ある晩、乳母のペゴティに、ワニの物語を読んで聞かせるエピソードがある。ディケンズが幼少の頃から朗読や演劇のまねごとが好きだったことは、ジョン・フォースターなどの『ディケンズ伝』に書かれている。いつもディケンズが演劇ごっこのリーダーであったことや、街頭で乞食少年のまねをして、通行人からお金をせびり取ったことも、フォースターの名著に紹介されている²²⁾。アンガス・ウィルソンは、『ディケンズの世界』(1970)の第1章「幼年時代」の書き出しを、「やあ、出て来た！ 仮面だ！」²³⁾という『クリスマス物語』の中の言葉で始めて、この「仮面は、一方において幼児期から死にいたるまでのディケンズの人生の楽しみを中心となっていた演劇や、役者を象徴すると同時に、自己および他人についての欺瞞、偽善、陽気と邪悪の両方の芝居をも象徴するのだ」²⁴⁾と言っている。

ディケンズの父のジョンも芝居好きで、幼いディケンズを芝居見物に連れて行ったり、シェイクスピアの話をしたりした。『ヘンリー四世』第1部の「追いはぎの場面」(2幕2場)の背景になっているロチェスターの近くのギャズヒルへも案内したという。そのときに見た立派な屋敷に憧れた貧しいディケンズ少年が、小説家として成功してから、その屋敷をついに手に入れ、そこで息を引き取ったというのも、有名な逸話²⁵⁾である。シェイクスピアこそは、ディケンズの劇的な小説作法と豊かな人物造形の手本になった劇作家であった。

ディケンズの姉のファニーも、芸術的に大きな影響を与えた。家庭内でディケンズの最も親密な遊び相手であった彼女は、音楽の才能に恵まれていて、王立音楽院の寄宿生になった。「彼ら姉弟は二人でよく二重唱を歌っては、近所の人たちの喝采を受けていたが、彼のコミック・ソングや物まね——結局は世界第一流の喜劇的天才の先触れということになる——のほうが、彼女の

才能よりももっと好評であったはずである。それが今や彼女は選ばれて、コンサート歌手への道が開かれ、彼はあえなくもロンドンの町に浮浪児同然に取り残されて、自力で活路を開いていくほかなくなったのである²⁶⁾。

そうしたディケンズではあったが、彼は決して演劇への夢を捨てることはなかった。15歳の時、弁護士の事務所に勤めるようになると、自分のポケットマネーで、せっせと劇場通いをするようになった²⁷⁾。コヴェント・ガーデンやドゥルーリー・レインやヘイマーケットのギャラリー席の料金は1シリング、当時は8時か8時半の開演で、9時以後は半額料金だった。ディケンズはこうした「メイジャー」の王立劇場ばかりでなく、ロンドン近郊の「マイナー」な劇場へも、ほとんど毎晩のように通って、シェイクスピアはもとより、ファースやバーレスクやメロドラマなどの公演に親しみ、セリフを暗唱し、所作をまねたりして、俳優という職業に憧れた²⁸⁾。

20歳の時には、ディケンズが特に心酔していた当時の名優チャールズ・マシューズ²⁹⁾の役柄を練習し、俳優になる決心をすると、コヴェント・ガーデンのステージ・マネージャーであったジョージ・バートレー³⁰⁾に手紙を書いて、オーディションをしてもらうことになった。ところが、姉のファニーを歌の助っ人に頼んで受ける筈であったオーディションは、ひどい風邪をひいたために³¹⁾、諦めざるをえなくなった。その数週間後に、ディケンズは叔父の紹介で議会報道誌「ミラー・オブ・パラメント」の記者になったので、オーディションの再申請はしなかった。続いて夕刊新聞「トゥルー・サン」³²⁾にも記事を書くようになり、記者の仕事の片手間に書いた投稿作品「ポプラ通りの晚餐会」³³⁾が、「マンスリー・マガジン」の1833年12月号に掲載された以後は、次第に文筆で生活するようになった。そして短い作品を寄稿していた「イブニング・クロニクル」の編集長ジョージ・ホガース³⁴⁾の長女キャサリン³⁵⁾と結婚、『ボズのスケッチ集』³⁶⁾ (1836) に続いて出版した『ピクウィック・クラブ』 (1836) の好評により、作家としての道が開けたので、職業俳優になる計画は棚上げになってしまった。

しかし、ディケンズが少年時代から抱き続けてきた演劇への夢は、一生涯消えることは決してなかった。ディケンズは小説家の職業に徹し切って、プロの役者になるのは諦めたが、アマチュア演劇に注いだ情熱と精力は大変なものだった。1833年、21歳の時に、ベンティンク・ストリートにあった父の家で上演した『ミランの乙女クラリ』³⁷⁾では、役者だけではなく、製作、演出、装置、舞台監督などを一手に引き受けて、演劇の「インプリサーリ

オ」³⁸⁾、つまり万能の座長ぶりを遺憾なく発揮した。それ以後、1857年の笑劇『アンクル・ジョン』³⁹⁾まで、約24年間に22本⁴⁰⁾もの芝居を上演し、その演技力は19世紀を代表する名優の一人ウィリアム・マクリーディ⁴¹⁾に高く評価された。中でも特に、1845年に演じたベン・ジョンソンの喜劇『十人十色』のキャプテン・ボバディル⁴²⁾の名演技は、画家C. R. レスリー⁴³⁾の筆によって描かれているので、その片鱗を垣間見ることができる。

このようにして、演劇に対する夢と情熱と実践を、ディケンズは生涯一貫して持続していたので、それが1858年から死ぬまで続けた「公開朗読」の推進力になったのである。

3. 劇作家ディケンズ

ディケンズは、10歳の頃、最初の劇『インドの君主ミスナー』⁴⁴⁾を書き、21歳の時に書いた『オウセロ』⁴⁵⁾という題のバーレスクは、父のジョン・ディケンズを含むアマチュアの役者たちによって上演されたが、いずれも台本は残っていない。したがって、一般公開された最初の劇は、1836年9月29日に、セント・ジェイムズ劇場で初演された『おかしな紳士』⁴⁶⁾ということになる。2幕の「コミック・バーレッタ」で、上演時間は1時間20分、ディケンズが24歳の時の作品である。この「小喜歌劇」は、1836年2月に2巻本で出版して評判を取った『ボズのスケッチ集』の中の一編「ウィングルベリーの大決闘」⁴⁷⁾に基づく作品で、50回もの上演記録をあげる成功を収めて、翌年に再演された。

劇作家ディケンズの第2作も、『ボズ』に題材を求めた『村の浮気女』⁴⁸⁾であった。ジョン・ハラが作曲したコミック・オペラで、1836年12月6日に、セント・ジェイムズ劇場で初演された。特に歌が好評で、「ディケンズ作詞」⁴⁹⁾と銘打った楽譜が出版され、ジョン・ブレイアムがソロで歌った「子供と老人」と「魅惑の春」⁵⁰⁾は、彼のコンサート・レパートリーになった。R. B. シェリダンの『デュエナ』(1775)以来、この作に匹敵する喜歌劇は書かれなかったとまで評価する人もいる⁵¹⁾。

第3作は、1837年3月にセント・ジェイムズ劇場で初演された「コミック・オペレッタ」の『彼女は彼の妻か?』⁵²⁾であるが、評価は「最高傑作」、「成功作」、「観客の受けはもうひとつ」⁵³⁾と、まちまちである。これが劇作家としてのディケンズの名前を冠して公式に上演され、そして出版された最後の劇作品となった。翌1838年には、当代最高の名優マクリーディのために書いた

一幕物ファース『点灯夫』⁵⁴⁾が、本読みの段階でマクリーディの気にいらず、結局はディケンズ自身を取り下げて、のちに短編に書き直して発表した。これ以後、ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』、『ニコラス・ニクルビー』、『骨董屋』といった長編小説を次々に発表して、小説家として成功したので、劇作の方は友人の創作や脚色を手伝うにとどめ、小説家としての創作に専念した。

ディケンズが手伝った劇作品は2編ある。『ナイティンゲール氏の日記』⁵⁵⁾は、『パンチ』の編集者であったマーク・レモンを助けて完成した一幕物のファースで、1851年5月27日に、ピカデリーのデボンシャ・ハウスの大広間で、ヴィクトリア女王とアルバート殿下ご臨席のもとに上演された。

最後の協力作品は、ウィルキー・コリンズとの合作になる『通行止め』⁵⁶⁾で、1867年12月にロンドンのアデルフィ劇場で初演されて好評を博し、フランスやアメリカでも上演され、剽窃版による公演さえあったという。ほとんどがコリンズの仕事で、ディケンズは主としてプロローグを書いたとされている。

劇作家としてのディケンズが残した劇作品は以上の6編⁵⁷⁾で、詩人としてのディケンズが書いた18編の詩を加えた全集が、没後100年に当たる1970年に、イギリスのヴィジョン・プレスから出版された。

ディケンズほどの創造力と活動力のある芸術家が、わずか6編の戯曲と18編の詩だけしか書かなかったのは、当時の劇壇や詩の世界に対する彼なりの考え方と洞察力の深さがあったからであり、そして何よりもディケンズ自身が、自分の本性と時代の要求に忠実であったからにほかならない。詩人としてのディケンズについては、ここで論じる余裕がないが、劇作家ディケンズに関しては、なぜ彼が片手間程度にしか劇作に関与しなかったかについて、考えてみる必要がある。

ディケンズ時代のロンドン劇壇は、有名な大物俳優が演劇製作から公演の現場まで、すべての実権を握っていた。いわゆる「アクター・マネージャー」⁵⁸⁾の全盛時代で、ディケンズが憧れたマッシュューズやマクリーディなどは、その代表的な存在であった。すなわち、劇作家よりも座頭俳優の意向が重要視される傾向が非常に強かったのである。シェイクスピア劇は座頭俳優の都合の良いように改作されて、盛んに上演されていた⁵⁹⁾。それ以外では、コングリーヴやシェリダンの風習喜劇⁶⁰⁾の再演と、ジョン・ゲイの『乞食オペラ』⁶¹⁾ (1728) の系統をひくコミック・オペラが主流で、ファースやバーレスクも

大いに歓迎されていた。したがって、本格的な劇作家の輩出しにくい時代であって、そうした演劇界の状況に、ディケンズは敏感であったと思われる。

もう一つ、音楽に頼らないシェイクスピアやファークァ⁶²⁾やバンブラ⁶³⁾などの「ストレート」な対話劇は、王室の特許を得たロンドンのコヴェント・ガーデン、ドゥルーリー・レイン、ヘイマーケットの三つの劇場⁶⁴⁾でしか上演することが出来ず、そうした王立劇場はアクター・マネージャーに支配されていた。ディケンズは、その他の劇場で頻繁に上演されていたファースやオペレッタやバーレスクといった分野で、彼の喜劇作家としての天分を生かす以外に、出番はなかったのである。

ディケンズが、アクター・マネージャーに捧げるための劇作に見切りをつけたのは賢明であった。劇作家としては、シェイクスピアという巨峰は越えられそうになかったからである。プロ俳優やアクター・マネージャーになるのを諦めたのも正解だった。マクリィーディという大物俳優の地位が不動だったからである。

しかし、6編の劇作で見せた優れた劇場感覚と、巧みな脚色技術は、本職の小説作法と、プロの朗読家としての「公開朗読」で、十二分に活用されることになるのである。

4. 劇的小説家ディケンズ

シェイクスピアを詩的劇作家と呼ぶなら、ディケンズは劇的小説家だと言えよう⁶⁵⁾。

シェイクスピアは、グローブ座の単純な舞台機構を頭において、観客を飽きさせない詩的想像力に満ちた話術と、見事な人物造形によって、喜劇や悲劇や史劇やロマンス劇を創造した。ディケンズは、新聞雑誌の寄稿欄や、一冊1シリングの月間分冊という形式を活用して、読者の心をつかむ巧みなストーリー・テリングと、写真のようにリアルな描写力によって、人生の悲喜劇を、ユーモアとペーソスに溢れる多くの長編小説や短編小説の中で表現した。英国が世界に誇るこの二人の芸術家に共通しているのは、あらゆる人間を暖かい目で見詰めているヒューマニストの寛容な心と、卓越した空想力と創造力、そして観客や読者を魅了して止まない劇的な語り芸であろう。シェイクスピアは詩劇という形式を使い、ディケンズは散文小説という形式を使っているが、両者は本質的に劇的な人生詩人であった。二人の作品が、時代や国境を越えて、翻訳され、翻案され、改作され、映画化され、ラジオやテ

レビで放映されるのは、両者の作品が人間臭い演劇的魅力に富んでいるからにほかならない。

シェイクスピア劇は、主筋と脇筋を交錯させ、短い場面を積み重ね、極度に少ないステージ・ディレクションと、詩的なダイアログやモノログの力だけで、劇的效果を盛り上げていく。ディケンズの小説は、そのまま舞台や映画で使えるようなりアリスティックなセリフと、説得力のある巧みな語りと、詳細で緻密な説明文によって、短編小説の連作のような各場面が、どれも演劇や映画の台本に似た構造と手法によって描かれている。このようにして、ディケンズをシェイクスピアと対比してみると、彼の小説のドラマ性が、より明瞭に浮かび上がってくることは確実である。

シェイクスピア劇が、セリフを少々カットし場面を少し入れ替えるだけで、そのまま映画脚本として使用されてきたように⁶⁶⁾、ディケンズの小説の各場面がそのまま映画の脚本として使えることは、サイレント映画の初期に映画理論を完成したエイゼンシュタインやグリフィスといった名監督⁶⁷⁾や、バラージュ⁶⁸⁾などの映画理論家によって例証済みである。そうしたディケンズと映画の関係については、いずれ稿を改めて論じることにして、ここでは、ディケンズのほとんど総ての小説が、出版された直後から頻繁に劇化されたという事実を列挙⁶⁹⁾することで、ディケンズが本来は劇的な小説家であって、彼の小説それ自体が実にドラマティックであることを想起する手掛かりにしたい。

ディケンズの出世作である『ボズのスケッチ集』(1836)の中の『洗礼』⁷⁰⁾は、雑誌に発表された直後の1834年に、J. B. バクストンによって一幕物ファースに劇化されて、ロンドンのアデルフィ劇場で上演された。ディケンズ自身が脚色した『おかしな紳士』が1836年にセント・ジェイムズ劇場で上演されたことは、すでに述べた通りである。

『ピクウィック・クラブ』(1836)は、W. L. リード⁷¹⁾の脚色により、1837年にアデルフィ劇場で上演されて以来、1838年までに6回も上演された。

『オリヴァー・トウィスト』(1837)は、J. S. コイン⁷²⁾の脚色で、1838年にセント・ジェイムズ劇場で上演されて以来、1868年までに8人もの脚色者によって、10回も上演された。

『ニコラス・ニクルビー』(1838)は、E. スターリング⁷³⁾の脚色によって、1838年にアデルフィ劇場で上演されて以来、1848年までに9人の脚色者によって、英米の舞台で12回も上演された。

『マスター・ハンフリーの時計』(1840)は、F. クーパー⁷⁴⁾によって脚色され、1840年にヴィクトリア劇場で上演された。同年、C. セルビー⁷⁵⁾や E. スターリングの脚色による上演もあった。

『骨董屋』(1840)は、E. スターリングの脚色によって、1840年にアデルフィ劇場で上演され、以後1870年までに、4人の脚色者により英米で6回上演された。

『バーナビー・ラッジ』(1841)は、スターリングとイエイツの共同脚色によって、1841年から翌年にかけてアデルフィ劇場で上演されたほか、1866年までに共同脚色を含めて7人の脚色者によって6回上演された。

『アメリカ覚え書』⁷⁶⁾(1842)は、E. スターリングの脚色によって、1843年にロンドンで上演された。

『マーティン・チャズルウィット』(1843)は、E. スターリングの脚色による3幕劇として、1844年にライシウム劇場で上演され、それ以後1868年までに、8人の脚色者により英米で10回も上演された。

『クリスマス・キャロル』(1843)は、E. スターリングの脚色により、1844年にアデルフィ劇場で上演されて以来、1860年までに5人の脚色者によって6回上演された。

『鐘の音』(1844)は、マーク・レモンとアベケット⁷⁷⁾の共同脚色により1844年にアデルフィ劇場で上演され、E. スターリングの脚色は1845年にライシウム劇場で上演された。

『炉端のコオロギ』(1845)は、アルバート・スミス⁷⁸⁾の脚色により、1845年から翌年にかけてライシウム劇場で上演されたほか、1862年までに E. スターリングなど3人の脚色者によって7回上演された。

『ドンビー父子』(1846)は、T. P. テイラー⁷⁹⁾の脚色で、1847年にストランド劇場で上演されたほか、1861年までに3人の脚色者によって7回上演された。

『人生の戦い』(1846)は、アルバート・スミスの脚色による三幕劇として、ライシウム劇場で1846年に上演され、それ以後1853年までに、4人の脚色者によって英米で上演された。

『とり憑かれた男』(1848)は、マーク・レモンの脚色によって、1848年から翌年にかけて、アデルフィ劇場で上演された。

『デイヴィッド・コパーフィールド』(1849)は、G. アルマー⁸⁰⁾が三幕の家庭劇に脚色して、1850年にストランド劇場で上演され、それ以後1870年まで

に5人の脚色者により、8回上演された。

『荒涼館』(1852)は、J. シンプソン⁸¹⁾の脚色による四幕劇として、1874年に上演され、それ以後も様々な形で上演された。ディケンズの存命中に脚色上演されなかった数少ない作品の一つである。

『つらいご時世』(1854)は、フォックス・クーパーが三幕の家庭劇に脚色し、1854年にストランド劇場で上演された。1864年に別の上演もあった。

『七人の哀れな旅人』⁸²⁾(1854)は、雑誌「家庭の言葉」のクリスマス号に発表された短編で、W. リーヴが三幕劇に脚色して、1863年にロンドンで上演された。1869年までには、別の2人の脚色者による上演が2回あった。

『ヒイラギ旅館のブーツ』⁸³⁾(1855)は、雑誌「家庭の言葉」の12月号にクリスマス物語として発表された短編で、ベン・ウェブスターが一幕劇に脚色して、1856年にアデルフィ劇場で上演された。J. B. ジョンストンの脚色による寸劇『ヒイラギ旅館のブーツ』も、同年にストランド劇場とグリーシャン劇場で上演された。この短編はディケンズの公開朗読の得意なレパトリーでもあった。

『リトル・ドリット』(1855)は、J. B. ジョンストンの脚色による家庭劇として、1857年にストランド劇場で上演された。

『二都物語』(1859)は、トム・テイラー⁸⁴⁾がプロローグ付きの二幕劇に脚色して、1860年にライシウム劇場で上演された。同年に別の脚色者による上演もあった。

『大いなる遺産』(1860)は、W. S. ギルバート⁸⁵⁾の脚色で、1871年にコート劇場で上演された。原作者の没後上演としては2作目である。

『われらが共通の友』(1864)は、H. ファーニーの脚色で、1860年にサドラーズ・ウェルズ劇場で上演された。同年に別の脚色者による上演もあった。

『エドウィン・ドルードの謎』⁸⁷⁾(1870)は、未完に終わったが、様々な劇作家たちが、それぞれ結末を付けた脚色を試みた。最初の脚色はW. スティーンズで、1871年に四幕劇として上演された。

このようにして、ディケンズのほとんど総ての作品は、作者の存命中に脚色上演された。これはディケンズの抜群の人気と、小説の演劇性を如実に物語っている。

5. 非公開朗読から「公開朗読」へ

ディケンズの親友で、彼の伝記を書いたジョン・フォースターが、「公開朗読」の「原点」⁸⁸⁾だと見なしている1844年12月2日の非公開朗読会は、ロンドンのリンカンズ・イン・フィールドにあるフォスター邸で行われた。イタリアのゼノアで2冊目のクリスマス・ブックとして『鐘の音』を書き上げたディケンズは、その原稿を持ってフォースター邸を訪れると、出版に先立って、友人達を前に、非公開の朗読会を開いた。そのとき招かれた人々の中には、フォースターのほかに、カーライルをはじめ、『パンチ』を代表するジャーナリストのダグラス・ジェロルド、画家のマクリース、そしてディケンズの弟のフレデリックなど約10名がいた。その様子は、フォースターの『ディケンズ伝』に記録されているばかりか、『鐘の音』の挿絵画家の一人でもあったマクリースによるスケッチが残っていて、『ディケンズ伝』に収録されている⁸⁹⁾。

このときの朗読が好評だったので、自信を持ったディケンズは、それから約10年後、友人から慈善募金のためのクリスマス朗読会への協力を要請されたとき、『クリスマス・キャロル』を「公開朗読」して大成功を収めたことは、すでに最初に述べた通りである。この種の慈善朗読会は、それ以後も、小説創作の合間を縫って、時間の許す限り続けられた。1853年から1858年までの間に、さまざまな公共施設や機関に懇望されて行ったチャリティのための朗読会は、フォークストン、チャタム、バーミンガム、ピータバラ、シェフィールド、コヴェントリー、エディンバラなどで18回⁹⁰⁾も行われて、自作朗読家としてのディケンズの声価は高まる一方だった。

こうした背景があった上で、1858年4月29日から7月22日までの約3か月間近くにわたって、ロンドンにおける第1回の公開朗読シーズン⁹¹⁾が行われ、大きな反響を呼んだ。それ以後ディケンズは、亡くなるまでの12年間に、地方巡業やアメリカ公演を含めて、約450回もの驚くべき回数にのぼる「有料」の公開朗読会を実施した。それ以前の慈善朗読会を含めると、公開朗読の回数は472回⁹²⁾になる。ディケンズは紛れもなくプロフェッショナルな自作朗読家になったのである。

ディケンズが、友人のフォースターなどの反対⁹³⁾を押し切り、劇的な自作小説を、劇作家や俳優や演出家としての天賦の才能を生かして自作自演した公開朗読の全貌を、ここに初演順に一覧表で示し、それに朗読回数を加えて、

晩年の偉業を振り返っておきたい。

1. 『クリスマス・キャロル』	1853年12月27日初演	127回
2. 『炉端のこおろぎ』	1853年12月29日初演	4回
3. 『鐘の音』	1858年5月6日初演	10回
4. 『リトル・ドンビー』 ⁹⁴⁾	1858年6月10日初演	48回
5. 『ヒイラギ旅館のブーツ』	1858年6月17日初演	81回
6. 『ミセス・ギャンプ』 ⁹⁵⁾	1858年6月17日初演	60回
7. 『哀れな旅人』 ⁹⁶⁾	1858年6月17日初演	30回
8. 『バーデル対ピクウィック』 ⁹⁷⁾	1858年10月19日初演	164回
9. 『デイヴィッド・コパーフィールド』	1861年10月28日初演	71回
10. 『ニコラス・ニクルビー』	1861年10月29日初演	54回
11. 『ボブ・ソーヤー氏のパーティ』 ⁹⁸⁾	1861年12月30日初演	64回
12. 『ドクター・マリゴールド』 ⁹⁹⁾	1866年4月10日初演	74回
13. 『マグビー駅のボーイ』 ¹⁰⁰⁾	1867年1月15日初演	8回
14. 『バーボックス兄弟』 ¹⁰¹⁾	1867年1月15日初演	5回
15. 『こびとのチョップス氏』 ¹⁰²⁾	1868年10月28日初演	5回
16. 『サイクスとナンシー』 ¹⁰³⁾	1869年1月5日初演	28回
17. 『とり憑かれた男』 ¹⁰⁴⁾ (1848)		未朗読
18. 『バステューユの囚人』 ¹⁰⁵⁾ (1859)		未朗読
19. 『大いなる遺産』 (1860)		未朗読
20. 『リアリパー夫人の下宿部屋』 ¹⁰⁶⁾ (1863)		未朗読
21. 『信号手』 ¹⁰⁷⁾ (1866)		未朗読

この朗読順に、未朗読台本をも加えて、ディケンズの公開朗読を研究し、それを通してディケンズ文学の本質と朗読意図を探求してみたい。ディケンズが残した21編の朗読台本は、膨大な量のディケンズ文学の貴重なエッセンスであるからだ。

NOTES

1. The Germ of Public Readings

1. Charles John Huffam Dickens was born at Landport near Portsmouth on 7th February 1812. He died at Gad's Hill Place on 9th June 1870. Dickens's remains were buried in the Poet's Corner at Westminster Abbey.
2. CHARLES DICKENS: THE PUBLIC READINGS, edited by Philip Collins, Oxford University Press, 1975.
3. John Forster, THE LIFE OF CHARLES DICKENS (1874). The quotations in this article are from the Chapman and Hall edition published in 1893. The first "public readings" were mentioned in Book 7th, II Home Incidents, pp. 443-444.
4. A CHRISTMAS CAROL (1843).
5. THE CRICKET ON THE HEARTH (1845).
6. "The result was an addition of between four and five hundred pounds to the funds for establishment of the new Institute; and a prettily worked flower-basket in silver, presented to Mrs. Dickens, commemorated these first public readings to nearly six thousand people" (J. Forster, *ibid.*, p. 443).
7. J. Forster, THE LIFE OF CHARLES DICKENS, Book First, IV Newspaper Reporting and Writing, p. 39: "He went to the theatres almost every night for a long time; studied and practised himself in parts. . . ."
8. Paid Public Readings (cf. J. Forster, *ibid.*, Book Eighth, p. 504).
9. cf. J. Forster, *ibid.*, Book Eighth, VII Third Series of Reading, pp. 538-546 and Book Eleventh, Last Reading 1868, pp. 621-623.
10. PICKWICK PAPERS, OLIVER TWIST, NICHOLAS NICKLEBY, THE OLD CURIOSITY SHOP, BARNABY RUDGE, MARTIN CHUZZLEWIT, DOMBEY AND SON, DAVID COPPERFIELD, BLEAK HOUSE, HARD TIMES, LITTLE DORRIT.
11. Dickens first met Ellen Ternan, a young actress, in July 1857 and fell in love with her. He was separated from his wife. cf. Angus Wilson,

- THE WORLD OF CHARLES DICKENS (1970), Chapter 5.
12. Dickens and his wife Catherine had ten children. Only one of them, Dora had died young when they separated in 1858. Charles Culliford Boz Dickens (1837-1896), Mary Dickens (1838-1896), Kate Macready Dickens (1839-1929), Walter Landor Dickens (1841-1863), Francis Jeffrey Dickens (1844-1886), Alfred Tennyson Dickens (1845-1912), Sydney Smith Haldimand Dickens (1847-1872), Henry Fielding Dickens (1849-1933), Dora Annie Dickens (1850-1851), Edward Bulwer Lytton Dickens (1852-1902).
 13. Referring to his marital unhappiness, he wrote: "I must do something, or I shall wear my heart away" (cf. P. Collins, *ibid*, Introduction p. xxi).
 14. Dickens first met William Makepeace Thackeray in 1836 when he offered to illustrate *Pickwick* for him. Dickens quarreled with Thackeray over the YATES affair in 1858. Edmund Yates, a young gossipy journalist, the son of a well-known actress, wrote an impertinent hostile account of Thackeray. Dickens supported Yates's appeal to Dickens (cf. J. B. Priestley, *CHARLES DICKENS*, Thames and Hudson, 1961, pp. 96-98).
 15. Dickens bought Gad's Hill Place in March 1856. cf. J. Forster, *ibid.*, Book Eighth, Public Reader, III Gadshill Place, p. 507: It was at the close of 1855 the negotiation for its purchase began. "They wouldn't," he wrote 25th of November, "take £1700 for the Gadshill property, but finally wanted £1800. I have finally offered £1750. It will require an expenditure of about £300 more before yielding £100 a year."
 16. "The net profit to himself, thus far, had been upwards of three hundred pounds a week; but this was nothing to the success in Scotland, where his profit in a week, with all expenses paid, was five hundred pounds" (J. Forster, *ibid.*, p. 521).
 17. A TALE OF TWO CITIES, GREAT EXPECTATIONS, OUR MUTUAL FRIEND.
 18. William Shakespeare (1564-1616) was a great impresario in the world of drama. He was a dramatic poet, actor, director, dramatist, one of

the owners of the Globe Theatre.

19. Charles Chaplin (1889-1977) was a comic impresario in the film world. He was a greatest comedian, screen-writer, producer, director and composer of film music.
20. Noel Coward (1899-1973) was a very versatile impresario. He was an actor, playwright, producer, director, composer, singer, short-story writer, and film star.

2. Dickens's Affinities with the Theatre

21. DAVID COPPERFIELD (Oxford Illustrated Edition), Chapter 2, p. 16.
22. J. Forster, THE LIFE OF CHARLES DICKENS, Book First, III School Days and Start in Life, pp. 33-34. "Dickens was always a leader at these plays. . . . I quite remember Dickens on one occasion heading us in Drummond Street in pretending to be poor boys, and asking the passers-by for charity — especially old ladies."
Edgar Johnson, CHARLES DICKENS: His Tragedy and Triumph, Victor Gollancz, 1953, Chapter 2, The Happy Time, p. 14. "Charles was fond of reciting, too, reading Dr. Watts's THE VOICE OF THE SLUGGARD, the admiring Mary recalled, 'with such action and attitudes!'"
23. Angus Wilson, THE WORLD OF CHARLES DICKENS (1970), Chapter 1, Childhood, p. 9. "O! I know it's coming! O! the Mask!"
24. "The Mask above all, though it speaks for the theatre and theatre people, who were at the centre of much of Dickens's delight in life from his nursery years until his death, also speaks for the self-deception, the deception of others, the hypocrisy, the play-acting both hilarious and sinister" (A. Wilson, *ibid.*, p. 10). 翻訳は『ディケンズの世界』, アンガス・ウィルソン著, 松村昌家訳, 英宝社, 1979, p. 7)。
25. A. Wilson, *ibid.*, Life at Chatham, pp. 37-44.
26. A. Wilson, *ibid.*, London, p. 49 (松村昌家訳, p. 37).
27. J. Forster, *ibid.*, Book First, IV Newspaper Reporting and Writing, p. 39.
28. THE DICKENS THEATRICAL READER, edited by Edgar and

- Eleanor Johnson, Victor Gollancz, 1964, (Prologue, pp. 8-11).
29. Charles Mathews (1776-1835), best known for entertainments, known as AT HOMES.
 30. George Bartley, the Covent Garden stage manager (cf. THE DICKENS THEATRICAL READER, p. 11. DICKENS THE DRAMATIST, by F. Dubrez Fawcett, W. H. Allen, 1952, p. 8).
 31. "Literature owes much to this cold, for Dickens was a born actor and if he had kept this appointment he might well have been engaged by Mathews and Charles Kemble and then have spent the rest of his life on the stage" (J. B. Priestley, CHARLES DICKENS, Thames and Hudson, 1961, p. 16).
 32. "His uncle John Henry Barrow had in 1828 started a new venture called the MIRROR OF PARLIAMENT. . . . The Barrows had begun to realize that their young nephew had ability as well as ambition. Somewhere early in 1832 he was taken on by his uncle's paper, probably as a supernumerary of some kind. Not only this, but in the spring of the year a new sevenpenny evening newspaper, the TRUE SUN, was inaugurated under the editorship of Samuel Laman Blanchard. Dickens became a member of the reporting staff of this paper from its first day of publication, March 5, 1832 (E. Johnson, *ibid.*, p. 61).
 33. "A Dinner at Poplar Walk" in the MONTHLY MAGAZINE" (cf. E. Johnson, *ibid.*, p. 92).
 34. "On January 31, 1835, the proprietor of the MORNING CHRONICLE inaugurated an evening paper under the name of the EVENING CHRONICLE. George Hogarth, their music critic, was made editor of this new venture, and he asked Dickens to write for its first number a sketch" (E. Johnson, *ibid.*, p. 101).
 35. Catherine Hogarth (1815-1879). Dickens married Catherine at St. Luke's Church, Chelsea, on 2 April 1836. Catharine had two sisters, younger sister Georgina and the youngest Mary, five years younger than Catharine.
 36. SKETCHES BY BOZ (Collection of stories and sketches).

37. Dickens and his family put on amateur theatricals on 27 April 1833 in Bentinck Street, Manchester Square. The play was CLARI, THE MAID OF MILAN, written by Payne and Bishop. A cast of fifteen included Fanny as the heroine, Charles Dickens as her father, and Mr. John Dickens as a farmer. (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 140. Edgar and Eleanor Johnson, *ibid.*, pp. 11-12).
38. Impresario: "Dickens dominated the production, made himself director and stage manager, designed scenery, worried with the stage carpenter about simulating moonlight, played an accordion in the band, tyrannously rehearsed the entire cast" (Edgar and Eleanor Johnson, *ibid.*, p. 12).
39. UNCLE JOHN, a farce written by J. B. Buckstone.
40. cf. "Characters played by Dickens in Amateur Theatricals" in F. D. Fawcett's DICKENS THE DRAMATIST, pp. 235-237.
41. William Macready (1793-1873), British actor-manager and great Shakespearean actor.
42. Captain Bobadil in Ben Jonson's comedy EVERY MAN IN HIS HUMOUR (1598).
43. The painting by C. R. Leslie, R. A. , in the Dickens House, Doughty Street, London.

3. Dickens as Dramatist

44. MISNAR, THE SULTAN OF INDIA. cf. F. D. Fawcett, DICKENS THE DRAMATIST (W. H. ALLEN, 1952) p. 4.
45. O'THELLO (cf. Forward of COMPLETE PLAYS AND SELECTED POEMS OF CHARLES DICKENS, Vision Press, 1970).
46. THE STRANGE GENTLEMAN, staged at the St. James's Theatre.
47. THE GREAT WINGLEBURY DUEL, based on one of the SKETCHES OF BOZ (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, pp. 20-22).
48. THE VILLAGE COQUETTES, a comic opera with music by John Hullah (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 23-25).
49. "Words by Charles Dickens" (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 23).
50. Two of the solos, "The Child and the Old Man" and "There is a

Charm in Spring,” were John Braham’s special favourites (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 23).

51. “Richard Herne Shepherd, the first editor of Dickens plays, wrote that no English musical piece equal to *THE VILLAGE COQUETTES* had appeared since Sheridan’s *THE DUENNA*” (cf. Forward, *ibid.*).
52. *IS SHE HIS WIFE?* or, *SOMETHING SINGULAR!*, a Comic Burletta or farce (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, pp. 26-27).
53. “Probably the best of the Dickens plays to be performed at the St. James Theatre” (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 27). “Only a lukewarm reception” (Edgar and Eleanor Johnson, *ibid.*, p. 13).
54. *THE LAMPLIGHTER*, a one-act farce written for Macready (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 26).
55. *MR. NIGHTINGALE’S DIARY*, a farce written by Dickens and Mark Lemon for the Guild of Literature and Art and was first performed at Devonshire House in May 1851 in the presence of Queen Victoria and Prince Albert (cf. Forward, *ibid.*).
56. *NO THOROUGHFARE* was the fruit of collaboration with Wilkie Collins. First performed at the Adelphi Theatre, in December 1867 and based on the Christmas Number of *ALL THE YEAR ROUND* for that year, the dramatised version owes more to Collins than to Dickens (cf. Forward, *ibid.*).
57. “*A MESSAGE FROM THE SEA*, a dramatisation by Dickens and Wilkie Collins of their short story, was neither published nor publicly performed” (cf. Forward, *ibid.*). “The manuscript of *THE FROZEN DEEP* is so criss-crossed with emendations, additions, and alternations in Dickens’s hand that he might almost have claimed co-authorship” (cf. Prologue, *ibid.*). “During the 1860’s Dickens aided the Anglo-French actor Charles Fechter as a *PLAY DOCTOR*, adapting Bellev’s *THE KING’S BUTTERFLY* to more effective stage production, and giving much assistance in putting on *THE MASTER OF RAVENSWOOD*, a dramatization of Scott’s *THE BRIDE OF LAMMERMOOR*” (cf. Prologue, *ibid.*).
58. “Actor-manager: an actor who has his own company, in which he

himself is usually producer and star — Chiefly 19th century” (THEATRE LANGUAGE, Theatre Arts Books, 1961).

59. cf. G. C. D. Odell, SHAKESPEARE FROM BETTERTON TO IRVING (Charles Scribner’s Sons, 1920), vol. II.
60. Comedy of Manners: such comedies as THE WAY OF THE WORLD (1700) by William Congreve (1670-1792), SHE STOOPS TO CONQUER (1773) by Oliver Goldsmith (1730-1774) and THE SCHOOL FOR SCANDAL (1777) by Richard Brinsley Sheridan (1751-1816).
61. THE BEGGAR’S OPERA (1728), a ballad opera by John Gay (1685-1732).
62. George Farquhar (1678-1707): THE RECRUITING OFFICER (1706).
63. Sir John Vanbrugh (1664-1726): THE RELAPSE (1696).
64. “The only London theatres at that time licensed under Royal patent for STRAIGHT plays were Covent Garden, Drury Lane, and the Haymarket, the last-named licence operating only when the first two were closed for the summer RECESS” (cf. F. D. Fawcett, *ibid.*, p. 22).

4. Dickens the Dramatic Novelist

65. “Dickens is the greatest novelist to have written in English as Shakespeare is the greatest poet” (from Introduction to DICKENS AND WOMEN by Michael Slater (J. M. Dent & Sons, 1983).
66. cf. Alan Dent, HAMLET: THE FILM AND THE PLAY (World Film Productions, 1948). HENRY V (Classic Film Script, Lorrimer Publishing, 1984).
67. cf. DICKENS ON THE SCREEN in DICKENS THE DRAMATIST by F. D. Fawcett (W. H. Allen, 1952), p. 195.
68. バラージュ著, 佐々木・高村訳『視覚的人間』(映画のドラマツルギー), 創樹社, 1975, pp. 58-59.
69. PLAYS AND ADAPTATIONS OF THE WORKS OF CHARLES DICKENS FOR STAGE, SCREEN AND TELEVISION in F. D. Fawcett’s DICKENS THE DRAMATIST (Appendix A), pp. 232-254.
70. THE CHRISTENING adapted by J. B. Buckstone.
71. PICKWICK PAPERS adapted by W. L. Lede.

72. OLIVER TWIST adapted by J. S. Coyne.
73. NICHOLAS NICKLEBY adapted by E. Stirling.
74. MASTER HUMPHREY'S CLOCK adapted by Fox Cooper, C. Selby and E. Stirling also adapted the novel.
75. BARNABY RUDGE adapted by Stirling and Yates.
76. AMERICAN NOTES adapted by E. Stirling.
77. THE CHIMES adapted by Mark Lemon and A'Beckett.
78. THE CRICKET ON THE HEARTH adapted by Albert Smith.
79. DOMBEY AND SON adapted by T. P. Taylor, first played at the Strand Theatre.
80. DAVID COPPERFIELD adapted by G. Almer.
81. BLEAK HOUSE adapted by J. Palgrave Simpson.
82. SEVEN POOR TRAVELLERS adapted by W. Reeve.
83. BOOTS AT THE HOLLY TREE INN adapted by Ben Webster. J. B. Johnstone was another adapter of the short story which was one of Dickens's favourite subjects for public reading.
84. A TALE OF TWO CITIES adapted by Tom Taylor and performed at the Lyceum Theatre.
85. GREAT EXPECTATIONS adapted by W. S. Gilbert and performed at the Court Theatre.
86. OUR MUTUAL FRIEND adapted by H. Farnie and performed at the Sadler's Wells Theatre.
87. THE MYSTERY OF EDWIN DROOD adapted by W. Stephens.

5. From Private Readings to Public Readings

88. “. . . the germ of those readings” (J. Forster, *ibid.*), p. 267.
89. J. Forster, *ibid.*, A READING IN LINCOLN'S INN FIELDS, pp. 266-267.
90. J. Forster, *ibid.*, p. 444 and P. Collins, CHARLES DICKENS: THE PUBLIC READINGS (Oxford University Press, 1975), p. xxvi.
91. J. Forster, *ibid.*, First Public Readings, pp. 516-530.
92. P. Collins, *ibid.*, p. xxvi.
93. J. Forster, *ibid.*, pp. 504-506.

94. THE STORY OF LITTLE DOMBEY from DOMBEY AND SON.
95. MRS. GAMP from MARTIN CHUZZLEWIT (Chapter 19).
96. THE POOR TRAVELLER is the first tale in THE SEVEN POOR TRAVELLERS, the HOUSEHOLD WORDS Christmas number for 1854.
97. BARDELL AND PICKWICK referred to as THE TRIAL FROM PICKWICK is taken from PICKWICK PAPERS (Chapter 34).
98. MR. BOB SAWYER'S PARTY is taken entirely from Chapter 32 of PICKWICK PAPERS.
99. DOCTOR MARIGOLD appeared in the ALL THE YEAR ROUND Christmas number for 1865.
100. THE BOY AT MUGBY was privately read to the ladies of Dickens household on 20 October 1866 and published in the ALL THE YEAR ROUND Christmas number for the year.
101. BARBOX BROTHERS was published in the ALL THE YEAR ROUND Christmas number for 1866.
102. MR. CHOPS, THE DWARF was published in the HOUSEHOLD WORDS Christmas number for 1858.
103. SIKES AND NANCY is taken from OLIVER TWIST (chs. 45-50).
104. THE HAUNTED MAN was Dickens's Christmas Book for 1848.
105. THE BASTILLE PRISONER is taken from A TALE OF TWO CITIES (Book I, chs. 1-6).
106. MRS. LIRRIPER'S LODGINGS appeared in the ALL THE YEAR ROUND Christmas number for 1863.
107. THE SIGNALMAN appeared in the ALL THE YEAR ROUND Christmas number for 1866.